～ くらしの中に演劇を ～　**宮崎市民劇場**　**第183回例会**

2023年 2月17日（金） 開演18：30 （開場18：00）

会員制　入会金・月会費（大人2500円・学生1500円）

会　場：　メディキット県民文化センター（県立芸術劇場　演劇ホール）

問い合わせ　〒880-0805　宮崎市橘通東3－3－8　カブトビル3F　0985-62-0075

上滝啓太郎

渡会元之

早瀬栄之丞

中嶋宏太郎

松涛喜八郎

柳生啓介

藤川矢之輔

山崎辰三郎

武井茂

石嶋隆生

清水麻美

嵐市太郎

玉浦有之祐

有田佳代

岡村柿紅＝作／勝見嘉之＝指導

狂言舞踊 棒しばり

〈かいせつ〉『棒しばり』は、岡村柿紅が同名の能狂言をもとに、六代目尾上菊五郎と七代目坂東三津五郎にあてはめて書き下ろした舞踊劇。初演は大正五年。

舞踊の名手二人の手を縛って踊らせるという皮肉な趣向にねらいがあります。前進座では、昭和三十年、坂東三津之丞師の指導で、橘小三郎（のちの藤川武左衛門）・中村公三郎・坂東秀弥らで初演しました。

【あらすじ】所用のため屋敷を留守にする大名（渡会）は、召使いの太郎冠者（有之祐）と次郎冠者（宏太郎）が底ぬけの酒好きなので、大事な酒蔵が心配でならない。

そこで一策を案じた大名は、まず次郎冠者の両手を棒にくくりつけ、ついで太郎冠者を後手に縛りあげたうえで出かけていく。だが二人は、意地でも酒を飲んでやろうと酒蔵へやってきて、さて……。

三遊亭圓朝＝原作／平田兼三＝脚色／小野文隆＝演出進行

人情噺 文七元結 一幕四場

〈かいせつ〉落語でも御馴染み、三遊亭圓朝の人情噺を芝居にした、笑いと涙にあふれた傑作。前進座では一九四七年の初演以来、代々継承し上演されてきた人気演目です。いじらしい真心に泣き、引っ込められない意地に笑い、いかにも江戸っ子らしい登場人物たちが繰り広げる、心うるおす一幕をお楽しみください。

【あらすじ】左官の長兵衛（矢之輔）は、腕はいいがバクチと酒にかまけて稼業はほったらかし。女房お兼（栄之丞）との間には喧嘩が絶えません。娘お久（有田）は、そんな不和に心を痛めて、自ら吉原の遊女屋佐野槌に身を売って金を拵えようとします。娘の孝行に打たれた長兵衛は、すっかり目が覚め、懸命に働いて一年のうちに迎えにくると誓い、佐野槌から五十両を借り受けます。その帰り道、身投げしようとしている若い男文七（石嶋）を助けるのですが……。

九演連のみなさまへ

藤川矢之輔

この芝居は、中村翫右衛門・梅之助と受け継がれ、そろそろ上演回数一千回に迫る前進座の財産演目。私も翫右衛門の長兵衛で文七を、四十年ほど前に勤めました。最初にこの芝居を観たのは六十五年前、他の芝居の子役で関西を三か月回った時でした。面白いし、夜の部最後の出演でも他所へ行く訳に行かず、毎日客席から観ていました。京都南座公演の時は毎日芸舞妓のお姉さんたちと一緒に桟敷席で鑑賞、贅沢なものです。

高校時代落語研究会に入り、三年の文化祭で一時間におよぶ大ネタ「文七元結」を披露、翫右衛門・先代の国太郎、文七の梅之助の舞台を思い出しながら語りました。

江戸っ子の典型、左官の長兵衛は腕がいいのに酒と博打に明け暮れ家計は火の車、夫婦喧嘩が絶えず、見かねた娘が吉原の女郎屋に奉公、その身の代五十両を長兵衛は、身投げしようとする見ず知らずの文七にやってしまう。普通ではなんとも理解しづらいことですが、そこが江戸っ子。山田洋次監督がこだわる芝居の一つで、「男はつらいよ」の原点のような作品。そこがお楽しみいただけます。馬鹿な男を笑い飛ばして、しかしその心根に胸を打たれてくだされば幸いです。

一人は両手を後ろ手に、もう一人は六尺棒に両手を縛られたまま、主人の留守に蔵の酒壺を開けて酒盛り、酔って踊るという狂言の代表作を歌舞伎舞踊に仕立てた、身体能力抜群の「棒しばり」もどうぞお楽しみください。